

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

極東ロシアと東北地方との相対研究の可能性：
平成23年度文部科学省オープン・リサーチ・センター
一整備事業「東北地方における環境・生業・技術に
関する歴史動態的総合研究」研究学会内ワークショップ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎, 田口, 洋美, 福田, 正宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5127

平成23年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業
「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」

研究会内ワークショップ

極東ロシアと東北地方との 相対研究の可能性

国立民族学博物館
民族文化研究部教授・同副館長

東北芸術工科大学教授
東北文化研究センター副所長

東北芸術工科大学専任講師
東北文化研究センター研究員

佐々木史郎

田口洋美

福田正宏

東北芸術工科大学東北文化研究センターでは、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」に取り組んでいます。環日本海、極東アジアのなかの東北文化の位置づけについて研究を進めている、文化人類学者で外部研究員の佐々木史郎国立民族学博物館民族文化研究部教授と、東北芸術工科大学専任講師の福田正宏東北文化研究センター研究員、そして東北芸術工科大学教授の田口洋美東北文化研究センター副所長とが、文化人類学、考古学、民俗学と、それぞれの専門分野から議論を行いました。

田口 東北芸術工科大学東北文化研究センターでは、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」の中で、極東ロシアについて文化人類学、考古学、民俗学的な視座による研究が進められています。

今後北海道のアイヌ民俗、対岸の極東アジア先住民族の世界との研究のリンクが進められていくと思います。

この事業の外部研員である佐々木史郎国立民族学博物館民族文化研究部教授と、福田正宏東北文化研究センター研究員とで、私たちが進めている極東ロシアのアムール

川流域を舞台としたさまざまな研究の現状とこれからについて話し合いたいと思います。

佐々木 私は「適応」をキーワードに文化人類学の視点で研究を進めています。適応を大きく捉えると「人間がある程度安定的にそこに社会を作っているという状態」のことです。生態学者や考古学者は自然環境に対する適応というアプローチになりますが、文化人類学では社会的な適応や文化的な適応に重点を置いてきました。

これまで一〇年ほど調査してきました中で、ある文化が環境に適応していく場合、適応対象は自然環境だけでも社会環境だけでなく、その両方がミックスして人間社会に作用し、文化が生じていると考えるようになります。極東ロシアでは、あえて年代を限らずに調査対象を選定しています。

考古学では地形や気候に対する適応を調査してもらい、私たちは先住民や移民に焦点を当て、移民たちが持ち込んだきた社会組織が地形や気候などの自然環境とどう絡みながら文化を作ってきたのかに注目しています。

先史時代から現代まで、ヒトが住み着いてから数万年の歴史の中で、さまざまなヒトが入り込んでいます。それらのヒトが言語的な違い、社会的文化的な違いを乗り越えて、どういう適応してきたのかを通史的

極東ロシアと東北地方との相対研究の可能性

にみる。これをテーマにしています。

新石器時代の移住者と今の移民と、時代の違う対象を同じ場所で比較し、時代や自然環境によってどう適応してきたのか、その法則性を見い出せないかと考えています。

福田 東北文化研究センターに来る前、北海道で考古学研究をしていた時にオホーツク文化の調査に参加して、北方に興味を持ちました。

平成一一（一九九九）年から毎年、現地調査をしているが、ロシアには時間軸を示す資料がほとんど無い。ロシア人は段階発展論的な考え方をするので、時間軸にこだわらない。それなのに、日本人が、必要なところだけロシア側の意見を引用し、非常に漠然とした編年を作っている。それが気になっていたので、今は、編年を組み立てることを重点に調査しています。

ロシアのように調査事例が少なくても、放射性炭素年代測定により編年研究ができます。そうやって編年を出すことで、時間軸に沿った論を展開できるようになってきました。

去年はロシアのハバロフスク地方ウリチ地区最大の淡水湖、キジ湖で踏査しましたが、遺跡を見つけられませんでした。でも、ここにはない、ということがわかることも重要なので地道に調査しています。

他分野では、考古学の扱う古い時代のこ



アムール川



キジ湖

とを、新しい時代のことに都合のよいように利用することが多い。考古学の発掘は時間がかかりすぎ、その報告も全部しなげやいけないとなると、遅々としてなかなか進まないのが実情です。嘘をつくことはできないので、実施調査を細々と続けていき、少しでもデータを残していければいいと思っています。

田口 私は平成八（一九九六）年からロシアでの調査研究に関わっていますが、それ以前からずっと、日本で伝統的な狩猟技術でクマ狩りなどを行う猟師、マガギの研究のため東北中部の旅マガギの足跡を追ってきました。それと漁業関係の丸木舟にこだわりがあつて、漁具や漁船、和船の問題も意識してきました。

その中ですごく気になっていたのが、中国、ロシアの国境地帯の狩猟採集民の事例です。マガギをどういふふうアジアの中で位置付けるか。どうしようかと思っていたとき、黒澤明がロシア先住民の猟師を描いた映画『デルスー・ウザラ』が出てきたり、NHKが内モンゴルに住む狩猟民、オロチョン族の特集を組んだりしてたんです。その後も北方狩猟採集民の世界が映像で紹介されるようになってきた。

そんな中で実際にロシアに行つて研究するようになり、今年で一六年目になります。ロシアの狩猟採集民はどんな技術で、ど

ういう行動をしているのか。その実態を把握することが第一でした。ソビエト連邦時代のシステムと、それ以前のシステムはどれくらい残っているのかを調べたかった。

そのために罾の復元研究を外部研究員の佐藤宏之東京大学大学院教授とやってきました。そこから東南アジアの罾との共通性や、毛皮交易のインパクトも見えてきて、狩猟の技術的適応から社会文化的適応という問題へと研究が広がっていった。

秋田県の阿仁マタギの中には日露戦争後、日本領となった樺太に渡った人もいますよ。毛皮交易圏の世界規模的な拡大と、秋田マタギを中心とする日本の狩猟者の動きは連動してんじゃないか。そんな面も見えてきました。

それから、日本の狩猟は農耕とリンクしてる。それをどう説明するか。罾の配置や空間。そうした具体物で組み立ててみようと考えた。それが私の研究のコアになってきました。

ロシアの冬期間の狩猟活動に同行したのが初めて点として抑えた調査でした。ロシアも狩猟者が激減していて、現場が分かる人が減っている。今この機にやらないと、モデルがとれる調査はもう最後になってしまうと思うんです。

だから、これまで行ったところは冬の行動系を全部抑えておきたいし、夏も調査し

たい。そこまで押さえておけば、若い人が研究する時にデータにできるだろう。

できるだけ詳細な狩猟採集物リストを作っておきたい。タイガの自然利用がどういう細かい民族知の中で構成されてるか。具体的にリストを作っておきたい。それから、私もいろんな民族集落の遺跡に行っていますが、編年や時間軸が分かるだけでも研究も相当違ってくる。アムール流域なら河口、中流、上流と三、四カ所のモデルが必要なんじゃないだろうか。そんなことを考えています。

佐々木 新石器時代は情報が少ないからどうしても時間がかかりますね。もう少し時代が後になると、物質の量も増えてくる。

福田 ロシアの場合、鉄が出土すれば、中国と対比して年代を出すことができる。でも、鉄の及んでいない地域もあるので、かなり厳しいという側面がある。

佐々木 先住民が住んでいた所は、おそらく石器時代も人が住んでいる。人が住める所って結構集中していてそんなにバラけていませんからね。アムール辺りだと遺跡の立地条件が共通している。

福田 だいたいどの時代でも、同じ所に集落を作っていますね。それがアムールの特徴なんです。一つの遺跡に何層も文化層が出てくる。そうなると例えば鉄の入った時代にそれをやられると下の層が全て壊され

てしまっって、全く分からなくなってしまっわけです。

田口 アムール川の氾濫の仕方を見ていると、遺跡がいかに攪乱されやすいかがよくわかる。ものすごい河川氾濫が毎年のように起こっている中で、いかに遺跡を残し続けるのか。難しいところですよ。

福田 キジ湖の調査をやって分かったんですけど、ここは非常に水位の上下が激しい。ここはさすがに水が上がって来ないだろう、と思った所でも水でやられています。遺跡が無いというか、そういったことが原因になり、我々が見つけられないだけかもしれない。

佐々木 アムール川の勾配は一〇〇メートル下がるのに何百キロっていう距離がありますよね。ですから、ちよつとの増水であつという間に水位が上がっちゃう。常に氾濫状態にあるわけです。

田口 日本と河川規模が違うんですね。大陸の河は高低差も無いんです。アムール川の場合、問題なのはものすごく流路が長いのに河口が狭い。しかも冬季は凍つてしまっ。

佐々木 中流域がダム湖になってしまっ。だから我々が行ってる集落は、九つとも全部水没します。一九三〇年代まであつた集落すらも水没して無くなつてます。

ゴリン川流域にはかなりの遺跡があるん

だけど本流に出ると全く無くなってしまう。水害のほか、山火事もありますしね。

福田 アムール川流域には、一〇〇年周期で自然発火の山火事があったという調査結果があります。先史時代では、それがきっかけとなり、壊滅状態になったという考えもあります。

佐々木 シベリア中央のカラマツは大体三〇年周期で更新されています。だから樹齢一〇〇年以上の大木は非常にまれだと言われていますね。

キジ湖とその南西の町、デリカストリへ続く通路がありますが、一体、いつごろからサハリン間を結ぶ通路として使われるようになったんだろうか。

福田 これは道というか、小川でつながるだけです。通路に利用したかもしれません。江戸時代の探検家・間宮林蔵も手記に書いているので調べてみました。キジ湖周辺は現在はウクライナからの移民の限界集落になっています。数カ所あった村も、今はチルバとキジ、この二つしか残っていない。

ロシア政府はデリカストリとキジ湖を貫くパイプラインを作りたいみたいですね。そうなるとキジ湖は干上がって、アムール川の生態環境も壊れると思います。

佐々木 ソ連時代まではあの辺の連中が、やっぱり間宮林蔵と同じ道を通って、アザラシ猟に通ってたって話があるんですよ。



ロシアのスサノニ村



発掘風景

福田 距離も近く、それほど大変な道ではない。そういった意味では、間宮海峡につながる地点ではあるな、というのを実感しています。が、それは新しい時代のことであって、新石器時代などの狩猟採集社会では大動脈でなかったというのが私の考えです。

キジ湖は、景観としてはアムールのどん詰まりです。湖口のマリンスコエから入っていくと、もうここで終わりだなあ、という印象で、この先にアムールのな生態環境は存在しないという状況ですね。

田口 佐々木さんは今後はどんな展開を考えていますか。

佐々木 先住民と移民を交えて、アムール川流域の本当の歴史に光を当てていきたいですね。

あともう一つ、七世紀から一三世紀にかけて北海道を中心に栄えた擦文文化と、中世アイヌをどうやってつなげるか。北海道の先史以降の歴史を書きたいと思っています。

福田 発掘は掘ってみたいとわからないので、まだ人が入ったことが無い地域にも調査に入っています。思いきりはずす可能性もありますが、調査してみないとわからないわけですから、まずは進めていければと考えています。

幸い、そうしたことをゲリラ的に続ける

体力はありますので、あと二〇年ぐらい続けられれば、一年一遺跡としても、二〇遺跡はできるかな、と考えています。議論の土台となる基礎データを正確に示すことがまず必要です。

それから、田口教授の狩猟の研究や、斎正人東北文化研究センター教授先生が進めてる環境変動論ともリンクさせていければ、環日本海レベルで対比もできるのではないかと考えています。

田口 私は今後、極東ロシアの環境変動を基礎とした狩猟民族誌をまとめていきたいと考えています。

今日はありがとうございました。●

◆佐々木史郎（ささき・しろう）

一九五七年、東京都生まれ。国立民族学博物館民族文化研究部教授、副館長。東北芸術工科大学文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」外部研究員。東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。専攻は文化人類学。著書に『モンゴロイド系諸民族の初期映像資料—シベリア・北海道・樺太篇』日文研叢書20 国際日本文化研究センター（共著）、『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』（NHKブックス）ほか。

◆田口洋美（たぐち・ひろみ）B1—2911

一九五七年、茨城県生まれ。東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科教授、学科長、同東北文化研究センター副所長。狩猟文化研究所代表。東京大学大学院博士課程修了。専攻は環境学、文化人類学、民俗学。著書に『マタギ』、『マタギを追う旅』（共に慶友社）、『越後三面山人記』（農山漁村文化協会）など。

◆福田正宏（ふくだ・まさひろ）B1—3111

一九七四年、北海道札幌市生まれ。東北芸術工科大学専任講師、東北文化研究センター研究員。筑波大学大学院、東京大学大学院常呂実習施設助手などを経て本学へ。極東ロシア・シベリア考古学、縄文時代研究、北方文化研究、特に「異なる文化の接触」を研究テーマとする。著書に『極東ロシアの先史文化と北海道』（北海道出版企画センター）ほか。